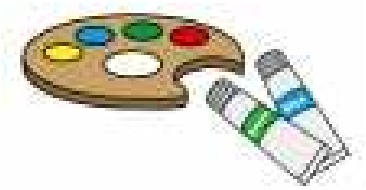
青丹彩展で感動に感謝！

（せいたんさい）

先日、第５４回青丹彩展に行った。これは現職と、退職した美術教師集団の展覧会とのことだ。さすがに実力者集団だけあって力作ぞろいだ。

まず、釘づけになったのは、作品「北の砂丘」だ。画面の大部分を荒涼たる大砂丘が広がり、いかなる生命も寄せ付けない厳しい自然から寂寥感がにじみ出る。砂丘のかなたに広がる群青色の海。この海から生命の鼓動が聞こえる。まるで力強い生命の息吹が秘められているかのようだ。あの群青色が今でも強烈な残像として網膜に焼き付いている印象的な作品だ。

次に作品「さあ、もう一杯」が目を引いた。晩酌をしている父親が銚子を画面手前に差し出している。息子にでも酒を勧めているのだろう。作品を見る者が左党でなくても、つい杯を出したくなる。あたかも自分の父親と晩酌を楽しんでいるような錯覚に陥る。画面全体を暖色系にまとめているので、ほのぼのとした親子関係が醸し出されている素晴らしい作品だ。

青丹彩展は、諸事情により今回をもって最後となる。とても残念。長い間、感動をいただき感謝あるのみだ。願わくは、これからも私たちが感動に浸れる場を与えてほしい。